資料 4

粘液性卵巣癌および境界悪性卵巣腫瘍の比較・検討に関する研究

１．研究の対象

1984 年から 2019 年までの間に、防衛医科大学校及び研究協力病院において、粘液性卵巣癌及び境界悪性卵巣腫瘍で治療を受けられた方

２．研究目的・方法

卵巣癌は近年増加傾向であり、予後不良な疾患です。日本では漿液性癌(36%)、明細胞癌(24%)、類内膜癌(17%)、粘液性癌(11%)の順番で多いです。粘液性癌は卵巣癌の中で比較的少ないですが、発症年齢が若く、早期で発見治療されることが多いです。Ⅰ期の症例は外科的治療のみで予後良好ですが、Ⅱ期以上の症例では漿液性癌と比較して予後が悪く、化学療法への治療抵抗性が強いことが原因と考えられています。しかし、卵巣癌の治療は欧米で最も多い組織型の漿液性癌を中心に治療開発が行われており、粘液性癌にも漿液性癌と同様の治療がなされているのが現状です。組織型別の治療法は確立しておらず、粘液性癌は、比較的頻度が少ない組織型ですが、進行例での予後が悪く、他の組織型と異なった治療法などの再検討が望ましい疾患です。

近年、粘液性癌の分類において侵入性浸潤と拡大性浸潤という浸潤形態が導入されました。侵入性浸潤は拡大性浸潤と比較して予後が悪いとされています。当院での検討の結果、浸潤形態は予後に大きく関係があり、侵入性浸潤は予後不良因子でした。更に、当院において拡大性浸潤型の粘液性癌と境界悪性卵巣腫瘍という比較的悪性度の低い卵巣癌を比較したところ、予後に差はありませんでした。しかしながら、この研究は１つの施設での研究で、症例数も少なく、研究として限界があります。

したがって、この研究では、侵入性浸潤型粘液性癌、拡大性浸潤型粘液性癌、及び境界悪性腫瘍を比較し、今までとは異なった視点から、粘液性癌の取り扱いについて検討することを目的としています。

３．研究に用いる試料・情報の種類

既に摘出・作成された病理組織を研究に用います。また診療録（カルテ）から病気の発症日（診断日）から死亡・再発・増悪までの期間、治療内容、抗癌剤治療の有無とその効果、癌のひろがり（進行期）、その他日常診療で得られた年齢や身長・体重などの臨床データ及び腫瘍マーカー等の検査データ等を採取し解析する予定です。

４．外部への試料・情報の提供

データセンターへのデータの提供は、特定の関係者以外がアクセスできない状態で行います。対応表は、当センターの研究責任者が保管・管理します。

５．研究組織

奈良県立総合医療センター　喜多　恒和
多摩北部医療センター　　工藤　一弥
西埼玉中央病院　　石井　賢治

６．お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：
防衛医科大学病院　産科婦人科　講師　宮本　守員
住所 〒359-8513　埼玉県所沢市並木 3-2
TEL：04-2995-1211（代表）内線：2363

研究責任者：防衛医科大学病院　産科婦人科　講師　宮本　守員

研究代表者：防衛医科大学病院　産科婦人科　講師　宮本　守員